対談

田邊会長 × 中村課長

今後のGFGについて

1982年に発足したGFG（がまかつファングループ）。
2025年現在、そのリーダーとなる全国GFG会長の田邊 克彦 さんと、
がまかつ広報課 課長の中村 多一郎さんに
「今後のGFGについて」熱く語り合っていただきました。

―いまのGFGの魅力

田邊）今までも何度か話したけどね、「釣りを通じて全国に友人や知り合いができること」これはもう本当にGFGに入って一番良かったこと。財産だなって思うところやね。若い人たちからすると、世代問わず、がまかつの有名な釣り人もたくさん所属しているから、彼らとも一緒に釣りができるチャンスがあることも魅力かなっていう気がするね。自分流で釣りをされていることも十分素敵だと思うけど、やっぱり全国各地を経験してきた人とはキャリアの差が出ると思うんよね。

中村）確かに。例えば、昔は結構「釣りクラブ」というのがいっぱいありました。昨今、周りを見てみると、どちらかいうと個人主義的なほうに流れがいきつつある中で、GFGっていうグループは、そういう「クラブ」という役割を果たしているのかなと思いますね。

田邊）そうだね。昔はクラブに所属しないと、釣行すらスムーズに行けなかったし、釣り方も勉強できなかったね。それが今は、SNSの情報で完結しているから、個人でも行きやすくなっていると思うよ。でも、一方的に配信される情報を鵜呑みにして全部を分かった気になってしまっている人って多いと思う。クラブは必要ないって一見思われるかもしれないけど、やっぱり大事なのは、その場で信頼できる人とコミュニケーションを取りながら実践して、リアルな情報を経験として得ること。色んな釣り人との交流で、自分の目指している釣りに応じた技術を習得することができる機会がGFGにはあるね。

中村）そういったコアな情報を仲間や先輩から聞けることで、引き出しの多さも全く違ってくるでしょうね。

田邊）経験豊富な先輩と一緒にいて、「こういうケースはこうだから、もうちょっと強めの竿がいい」とか、その人がテスターだったら、製品化するまでの裏話とかを聞いて、価格が高いと思っていたけど、納得いったとか結構あることだと思うよ。僕は、そのあと夜一緒に飲むことも楽しみの一つかな。

中村）そうですね。そういった機会ってあまりないことですからね。それに昔でいうクラブ単位は、その地域ごとに根付いていたところが多かったですよね。エリアごとだから、どうしても小さなコミュニティになりがちだったと思います。それがGFGだと、全国に広がっているということが大きなメリットとしてありますよね。だから、クラブではなく「がまかつファングループ」なんですよね。

田邊）そうだね。それに、グループとして地区、支部単位があるし、行くところによっていろんな情報も得られる幅は広いね。

中村）そういうことですね。それがいろんな人と横に繋がれるっていうことのより具体的な意味ですね。

田邊）そうそう、西ではこう考えているけど、東ではこういう考えなんやとか、西ではこんな釣りせんけど、東ではこういう釣りすんやとか、そういう発見がいっぱいあると思うよ。

中村）GFG活動の中で、そういうきっかけが生まれやすくなっているからですね。今までそのことを僕らは上手に表現できていなかったかもしれないです。全国で繋がれるのが良いですよっていう一言だと、はてなマークを浮かべる人が多くて。ただ、今の田邊会長の言葉を借りると、すごくスッと分かりますね。

田邊）あともう一つは、がまかつの社員さんとも関わる機会があること。

中村）販売店やフィッシングショーなどの展示会ですれ違うことしかなかったけれど、GFGだとそういった機会が増えるといったことですね。

田邊）展示会で会ったとしても、一人の「お客さん」としての認識だと思う。GFGのイベントに社員さんが顔を出してくれるから、そこで「ファングループの会員」として話す機会もできるからね。

中村）我々が想像している以上に、社員は皆さんに注目されているんですね。我々と話すことがメリットと感じていただいているだなんて驚きです。

田邊）もちろん。だって、話すとしても販売店の店員さんや店長さんで、まさか自分が愛用しているメーカーの社員さんと話せるなんて普通だったら考えられないよ。

中村）好きだからこそ、社員に伝えたい想いもきっとあるでしょうね。我々は、がまかつの歯車の一つとしてしか動いていないので、そこに価値を見出していただいているんであれば、そこはもっと意識しないといけないのかなと思いますね。

―どんな会長でありたいか。

田邊）僕自身が会員から地区本部長、副会長、会長になったんやけど、今まで伝統的にやってきて素晴らしいことだけど、ここはこうあるべきじゃないかなと思うことが地区本部長の頃にあったね。会長に就任して、それを実現に向けて色々変えさせていただいています。いつも言うように、ちゃんと会員さんの声が最終決裁をする場に届いて、反映させた方針を取り決めていくべきというのが軸かな。要は、トップダウンではなくボトムアップ。GFGはそうあるべきで、その形をしっかり作り上げたいなと思っています。

中村）実際どうですか。ボトムアップの道のりは？

田邊）まだ半ばよ。

中村）半ばですか。

田邊）だいぶ形はできたかなって思っているけど、これが現実的にしっかり機能するようにするにはね。

中村）もう少しかかるってことですね。

田邊）そうだね。もう一つ僕の役割として考えているのは、次世代にどう繋ぐか。今まではこういうことを考える必要のない時代だったと思う。これからは完全に継承できるように作り上げたいな。うまくいくかどうかわからんけど。これが、一番のやるべきことやと思うよ。

中村）長い歴史があるファングループなので、過去と未来を繋ぐのは非常に難しいですよね。

田邊）そうだね。今まで40何年間やってきたことを、あいつが勝手に変えるなって思われるかもしれんけど、それは会長をお受けするときに、変えますよと宣言しているからね。自分が退陣する時もすごくやりきった感というか。

中村）晴れやかに退くということですね。

田邊）そう。ある程度新しい形を作ってくれたって思われるように終わりたいな。

中村）勇退みたいなイメージですね。自分が自らね、もうやりきったぞと。

田邊）そうだね。あとはみんなに任せたぞと。形ができたときには、さっと引けるような。その形を作るのが一番難しいんだけどね。自分が経営者として長年やってきた経験と反省を活かすようにしているよ。

中村）よく仰っていますよね。反省もあるからこそ、今それができるんだっていうのはよく教えていただいています。

田邊）幸いね、地区本部長さんや本部役員にしても、非常に協力的で色んな意見も言ってくれるし、耳も貸してくれるから、ありがたいなと思っています。

中村）確かにそうですね。皆さんすごく協力的で。

田邊）これはね、仕事やないんよ。我々はあくまでも趣味の世界。だけど、4,000人の会員さんから預かった役職を全うせないかんと思って、みんなやっているよ。その根底に何があるといったら、がまかつに対する愛情とGFGに対する愛情があって。これがなかったらできんね。　我々から社員さんに対する愛情にも繋がる。すごいことやね。

中村）愛という言葉で身が引き締まる思いです。

田邊）愛情があるから喧嘩することもあるよね（笑）

中村）そうですね。愛がないと真っ直ぐぶつかることすら、できないですからね（笑）

―がまかつにとってGFGはどんな存在？

中村）言葉で表現するのは、すごく難しいなと思っていて。ただ、本当に長い歴史がある中で、切っても切れない、一つのファングループとしての関係性はもう超越しているんではないかなと思います。だからこそ、愛情もあり、苦労もあり…。ただ、やっぱり一緒に歩を進めていくべき関係性なのかなと。それが時代とともに、歩み方がちょっとずつ変わってきているところに、どう合わせていくのかっていうところが、今のGFGだと思いますね。多分、皆さんが「こんなんじゃないよ、がまかつは」って思っていることが多々あることを私たちもやっぱり痛感していて。そのなかで皆さんにどう満足してもらえるかっていうのを模索しているところです。先ほど、田邊会長の話にも出ましたけど、やっぱり過去と未来を繋ぐ難しさを、私たちもすごく感じています。だからそこの部分を見定めながら、以前よりもさらに良い関係を築いていきたい。そうするには、どうしたらいいかっていうところで、先ほどの話で出た「皆さんの持つ愛情」ですよね。そこの部分を我々がまかつ自体がもっと再認識しないといけないのかなと。ずっとファングループから愛をもらっているのに、それを返せていない部分があるんじゃないかなっていうのが、今ちょっと会長の話を聞きながら思いました。そこがこれからの一つのキーワードになってくるのかなと感じます。

―これからのGFG会員に求めるものは？

中村）先日の総会で藤井敏孝社長が仰ったことで、「釣り人の規範」であってほしいということですね。GFGは、がまかつ創業者である藤井繁克の「釣り師の地位をもっと向上したい」という想いのもとで、その想いに賛同してくださった釣り師たちで立ち上がったという話を聞いて、もちろん根底はそうあるべきだろうなと。ただ、世代が変わっていくにあたって、あまりそこを我々が強調できていなかった部分があると思います。なので、そこはもっと声高らかに今後皆さんに伝えていった方がいいのかなと思っています。実際、それをもう言われなくても自主的にされている方が多々おられるのは、もちろん我々も承知しています。若い方や新しく会員になった方に釣りを教えるのもそうですし、現場で釣り場を譲るっていうのも、皆さんすでに無意識のうちに自然と実行されていて、それを言葉にせずとも脈々と釣り師のマナーとして引き継がれていると思います。そこを、がまかつのファングループってこうありたい！ということを皆さんで改めて共有するっていうのは、これからの会員さんにしていってもらいたいなと。時代が変わっているなかで、その時代にフィットした考え方と今までの思いを混ぜ合わせながらですね。

田邊）今まで釣りができた場所が、釣り禁止になったりとか、釣り人のマナーによって、いろんなことが今起きていると思う。それは、そのマナー、いわゆる道徳自体が広く伝えられていないっていうことで、悪気がなく釣り場を汚したまま帰ったりとか、一般常識にプラスで釣り人のあるべき姿っていうのが伝えられていないからだと思う。GFGの各地区でのイベントでは、必ず撤収前には磯を綺麗に洗って、ゴミも片付けてください、なんなら他の釣り人が捨てているゴミも回収してくださいということを、必ず朝の集合したときに伝えているはずです。毎年水辺感謝の日には、色んなところで清掃活動があるし、それは会員さんの間で伝え合っているから実施できていることです。これが釣り人の行動規範というか。GFGの会員さん以外の方と釣りに行く機会は、いっぱいあると思うんです。そういうときに友人に対して、そのGFGで学んだマナーを伝えてもらいたい。そうすることによって、釣り人全体のマナーの向上、地位の向上にもつながる。それこそ先代である繁克会長が求められたそのGFGのやる役目だと思うんよ。それがまた、がまかつのグループであるという誇りとして胸に持ってほしいって思いますね。

中村）そうですね。すでに賛同して集まっている方々なので、皆さんはもう既に身についているよねと。そうじゃない人たちと一緒に行くときに、それを広めていきましょうっていうのは、もっと会社としても発信していくべきかなと思います。

田邊）そうすることで、GFGの輪も広がると思うよ。

（文　広報課 伊達聖）